

『南総里見八犬伝』研究

— 悪女「船虫」の人物像 —

石原 つばみ

はじめに

今回『南総里見八犬伝』の登場人物の中で特に「船虫」という人物について論じようと考えたのは、花田清輝氏の論文「もう一つの修羅」の中の「敵と味方とのあるところ、そこにはつねに二人の主人公がある」という言葉を受け、いつも注目されがちな主人公八犬士、善の側ではなく、もう一つの物語の主人公である悪の側に注目してみたいと思った。そんな、物語の中で「悪」の側の人間として描かれている人物達の中でも「船虫」という人物は、物語を通して長い間四度に渡って登場し、その度に夫（悪党）を変えては八犬士達に悪事を働く典型的な悪女として描かれている。物語の長期に渡って何度も八犬士の手から逃れ、四度も登場しては悪事を働いていく悪者はなかなか他には出てこないと思ひ、彼女に注目した。また、悪女・毒婦と言われながらも自分

の最初の夫の仇を何度も討とうとする姿に惹かれ、彼女がとうとう八犬士に捕まり、牛に突き殺されてしまう「死の場面」はとても凄惨で衝撃を受け、そんな死に方をしなければならなかった「船虫」にとっても興味が湧き、「船虫」という人物をテーマに取り上げようと考えた。一般的に典型的な悪女として論じられる「船虫」を、その登場から死まで彼女の生涯を追っていくことで、ただ「悪」という面からだけではなく、様々な角度から「自分なりの船虫像」を考察し、見つけていきたいと思う。

基本的には船虫が登場する話を中心に使用して考察する。そのため、『南総里見八犬伝』の第九輯卷之三、法会の場合までの物語前半部分を使用する。また、今回の論文では、船虫を含めた『八犬伝』に登場する悪女と孝女を比較し、作者滝沢馬琴が『八犬伝』の中で貫いている女性観や勧善懲悪論ということについて考察し、その論を貫こうとするが故に生まれた違和感や矛盾につ

いて、「船虫」に焦点を絞って考察していく。勸善懲惡という論理が貫かれた『南総里見八犬伝』という作品の中で、「船虫」という悪がどうしてこんなにも生き生きと描かれているのか、どうして「船虫」は牛に突き殺されるという残酷な死に方をしなければならなかったのかということについて検証していきたい。

一 『八犬伝』における悪女

『南総里見八犬伝』の中で「悪女」「悪いとされる女性像」とはどのような人物として描かれているのか、また、どのような特徴があるのか悪女の代表として主に「船虫」と「玉梓」を例にとり、検証していく。^{注2}

まず、悪女の行う行為として作中でよく挙げられるものが「密通・姦通」や「貞操を守らない」ということである。「貞女は二夫にまみえず」という言葉があるように、これらの行為は男性よりも女性の罪としてあげられる場合が多い。玉梓は作中で、里見家を怨み、その怨念で里見家を祟る大悪として描かれている人物である。作中では肇輯卷之三第六回の玉梓処刑の場面で金碗八郎孝吉が玉梓に「身は只綾羅に纏はして、玉を吹き桂を焼、富貴歡樂極りなけれど、なほ厭きたらで、定包と密通せり。その罪これ二ツなり。」と言っており、玉梓は神余光弘の妾であったにも関

わらず、山下定包と通じたことを大きな罪だと批判されている。そして、『八犬伝』第七輯で登場する夏引という人物も、四六木木工作という夫が居ながら武田家の臣泡雪奈四郎と密通しており、作中では奈四郎と共に夏引の夫木工作进行を殺し、その罪を犬塚信乃になすりつけようとするが失敗し、最後には処刑されてしまう悪女として描かれている。そして、悪女船虫は並四郎、赤岩一角（怪猫）、酒顛二（山賊）、嬬内、と幾度も夫を替えており、しかもどの夫も悪人である。貞操を守ることとは一切していない。さらに、船虫は第七輯卷之三第六十七回で妖怪の妻となり、赤岩一角と共に悪事を働いた罪で籠山逸東太縁連に捕まった時も、偽の涙を流し、女の弱さを強調し、挙句逸東太と枕を共にして女の武器を最大限に利用して逃走を謀った。このように、作中で悪女と呼ばれる女性達は操を守らず、誰それかまわず枕を並べたり、密通しているという特徴がある。

次に悪女の特徴としてあげられるのが、「夫を裏で操る」ということである。肇輯卷之二第二回では神余光弘は玉梓を寵愛するあまり、「内外の賞罰さへ、渠に問て沙汰せしかば、玉梓に賄賂ものは、罪あるも賞せられ、玉梓に媚ざれば、功あるも用ひられず。是より家則いたく乱れて、良臣は退き去り、佞人は時を得たり。」とある。また、金碗八郎孝徳が玉梓に肇輯卷之三第

六回で「寵に誇りて主君を蕩し、政道にさえ手をかけて、忠臣を傷賊たる、その罪これひとつなり。」と言っており、玉梓が夫の政治におおいに口を出し、影響を与えていたことが分かる。しかも、夫の悪政を諫めるような助言をするのではなく、自分の利益を一番に考え、自分の利益の為に他人を利用する為、自らの美貌と女の武器を使って夫をたぶらかし、夫を裏で操るのである。船虫も第七輯卷之一第六十二回では、船虫の夫である赤岩一角（妖怪）が八犬士の一人である犬飼現八によって左目を傷つけられると、その傷を治す為、妖怪に殺される前の赤岩一角の息子である角太郎（後の八犬士犬村大角）の妻雛衣の胎児を目薬にするという計画を実行に移し、この計画を夫に話すと一角は「頻りに誓めて已ざりけり。」と船虫を褒めたたえている。また、船虫が赤岩一角の妻になった経緯を記した箇所では「赤岩一角武遠が、婢妾を求るとて、媒始するものありしかば、便りに就きて彼処に赴き、一角が側室になりて、いく程もなく後妻に、執立られしは、船虫が、男に媚びる才ありて、奸智に長ける所以なりけり。」（第七輯卷之一第六十二回）という風に船虫には男に媚る才能があり、さらには奸智、悪知恵に長けているということが書いてある。第七輯卷之三第六十六回には、船虫の行為に対して犬飼現八が「夫の為に謀るとも、悪事と知らば諫めもすべきに、残忍

邪慳を事として、夫に忠ある貞女といはんや。」と言っていることから、夫の為と言いつつも、悪事であることをわかった上で行い、夫に媚びることは明らかに悪事だということをはっきりと示している。そして、第六輯卷之五下冊第六十回では「船虫といふ妾は邪知逞しく慾ふかく、行ひ穢れし淫婦なれば、彼同病は相憐み、同気は相歎ぶ沿習にて、妖邪に触れても恙なく、且妖獸のこゝろに慳ひて、はや正妻になりしかば」とあるように、ここで船虫は、人間の悪女という存在を越えた妖怪レベルの悪という存在になっていることがわかる。船虫は妖怪に気に入られるくらい、男に媚び、気に入られる力を持っているのである。このように、悪女には、男に媚び、夫の為と言いつつも、自分の利益の為に夫を影で操り、悪事を働くという特徴がある。

そして、もう一つ悪女の特徴は自ら死を選ばないということである。自らの悪事がばれた時に捕まり、死を迫られると必ず言い訳をして許しを乞おうとする。肇輯卷之三第六回の玉梓処刑の場面でも「女はよろづあはくしくて、三界に家なきもの、夫の家を家とすなれば、百年の苦も楽も、他人によるといはずや。」と命乞いをしている。船虫もまた、第七輯卷之三第六十六回において、赤岩一角と共に悪事を働いた罪で捕えられた時に「世に女子と生れしもの、好きも歹も夫の為に、心を用ひぬ事のなけれ

ば、夫の指揮に已ことを、得ざりしよしを猜し給え。」という風に許しを乞おうとしていることがわかる。このように、悪女は自ら死を選び、自害するということはしないのである。

以上をまとめると悪女には、貞操を守らず、密通や姦通をし、己の利益の為に夫や男に取り入って影で操り、自ら死を選ぶことはいないという特徴がある。

二 『八犬伝』における孝女・貞女

では、悪女とは正反対とされる孝女・貞女といわれる女性達の特徴はどのようなものなのだろうか。「浜路」と「雛衣」を例に取り、検証していく。

孝女・貞女の特徴としてひとつには、自分の親への「孝心」というものが非常に強いということが挙げられる。これは、自分の産みの親に対しても、育ての親に対しても変わらない。例えば、第三輯巻之三第二十六回で自分の夫は犬塚信乃だけだと心に決めている浜路は、育ての親である墓六、亀篠夫婦の企みで浜路に恋をした簸上宮六と結婚させられることになるのだが、浜路はなかなかその結婚を承諾しない。そこで墓六、亀篠夫婦は浜路がこの結婚を承諾しないのなら自分達は死ぬといって腹を切る演技をする。すると浜路は「よしや貞女といはるゝとも、又只不孝の子と

ならば、いづれ人たる道は欠けなん。仰せに従ひ侍るべし。」と言って結婚を承諾する。さらに、浜路は、まだ会ったことのない自分の生みの親のことを始終気にかけているのである。また、第七輯巻之二第六十五回で船虫、赤岩一角夫婦が一角の目葉の為に雛衣の胎児を求める場面でも、なかなか腹を切つて胎児を差し出すことを了解しない雛衣に対し、一角が自殺の演技をする、雛衣は「竟に脱れぬ定業ぞ、と覚期を究めて侍るかし。」と腹を切るのである。どちらも、親に対する孝心が強すぎるが故に起きたことであり、親への孝心の重要さがうかがわれる場面である。

次に特徴的なのが、「貞女は二夫にまみえず」ということを頑なに守り、自身の操をしつかりと守っているということである。第三輯巻之四第二十七回では簸上宮六と結婚することになった浜路が、幼い時から心に決めていた夫信乃以外の者とは夫婦になることはできないと首を吊つて死のうとする場面が描かれている。また、第七輯巻之二第六十五回では、雛衣は霊玉を飲み込んだせいで腹が膨らんでしまい、義父母である船虫と赤岩一角に懐胎を怪しまれるが、疑いを晴らすために自ら腹を割くのである。孝女、貞女と言われる女性達は自分の操を守る為、夫以外の男と密通をしていないという身の潔白を示す為ならば死すらも厭わないのである。このようにみていくと、「自ら潔く死を選ぶ」というのも、孝女・貞女

の特徴であるように思う。第三輯卷之四で浜路は網乾左母二郎に切られてしまうが、夫である信乃に操を立てて死んでいった浜路の様子を、たまたま通りかかった浜路の実の兄である大山道節忠とは称賛している。命を惜しまずに潔く死を選ぶという行為は作中では称賛に値する行為であるとされており、また、悪女にはない孝女、貞女に特徴的な行為であるということもわかる。

そして、もう一つ孝女・貞女の特徴として「涙」というものがある。「泣く」という行為は作中では孝女や貞女がよく行う行為である。悪女達の流す涙は往往にして偽り、嘘の涙であるが、心の底からの悲しみや嬉しさを表現する為の涙は孝女や貞女しか流さないのである。また、「涙」は女性の弱弱しさを表すようでありながら、浜路や雛衣は涙を流しながらも、時折大胆な行動を起こしている。例えば、第三輯卷之三第二十五回で、浜路は夜中に臥房を抜け出して信乃の寝所へ忍んで行き、泣きながら信乃に早く自分と結婚して欲しいと訴えかけ、しつこく信乃を口説こうとする場面がある。また、第六輯卷之五下冊第六十一回では、あらぬ懐胎の罪を着せられ、夫角太郎に離縁させられた雛衣が、角太郎の家の前で泣きながら自分は無実だと訴え、必死に角太郎を口説こうとする場面がある。二人とも、貞女といったつも、ただ弱弱しく操を守っているだけではなく、自分が正しいと思った時に

は大胆な行為を行い、自らの意見を主張していることがわかる。このようにみていくと、涙は女の弱さやはかなさを表すというだけではなく、孝女や貞女にのみ許された感情表現ということが言えるのではないだろうか。また、孝女や貞女は夫に取りいつて寵愛を受ける悪女とは違い、夫に忠を尽くしながらも、夫からの愛に恵まれず、浜路や雛衣の口説きの場面でも、夫に嘆息されたり無視をされるなど、どちらかといえば厄介者扱いされてしまうようなことが多いと言えるかもしれない。

以上をまとめると孝女には、親への孝心が非常に強く、己の貞操を頑なに守り、これが守れないのならば自ら潔く死を選ぶ。そして、感情表現としての涙を流すという特徴がある。

三 『八犬伝』における女性観

このように、『南総里見八犬伝』における悪女像と孝女・貞女像を見てきたが、共通して言えることは、『八犬伝』の中に登場する女性達は「社会的にとても弱い存在」として描かれているということである。浜路や雛衣のような善の側の女性であれ、玉梓や船虫のような悪の側の女性であれ、玉梓も自分を「三界に家なきもの」と言っているように、夫や男性の存在なしで、一人では社会で生きていくことができない弱弱しい存在として描かれて

いる。玉梓や船虫のように、男を欺き、利用して生きている女性達もあり、一見「強い女性」のようにも見えるが、彼女達も一人で生きていくのではなく、男性に媚びて取り入り、夫に従う妻の領域を出てはいない。生きる力や生命力、たくましさなどはあっても、社会の中では弱い存在とされ、明らかに女性の地位は男性より低く描かれており、女性は男性に付き従うものとして描かれている。船虫や玉梓などの悪女は、弱い女性であるという立場を上手く利用し、たとえ悪人であろうと夫や男に媚び、気に入られることで自分の身を守り、自分の地位を安定させようとしているようにも感じる。この女性達の姿からは作者馬琴の『八犬伝』における女性観というのが表れているのではないだろうか。女性は男性に尽くすべきであり、しかも、女性が生涯で尽くすべき男性、夫はたった一人でなければならぬという考え方が馬琴の女性観の中にあり、それは言ってしまうと男性優位の男に都合のいい論理であり、この論理が『八犬伝』という作品全体を貫いているのである。そして、この論理でいえば、男に従い、いいことになることが女性にとつての善の行為であるということができるといえる。しかし、悪女である玉梓や船虫も夫である男性に尽くしているということは変わらない。悪女といっても、決して夫に逆らったり、夫よりも地位の高い存在になることはない。ここには、た

とえ悪女としても、女性が男性の上に立つ、上の位になるということはありえない、あくまで女性は男性に従う存在である、という馬琴の貫いている女性観というものをうかがうことができる。

四 悪女「船虫」

では次に「船虫」という人物についてみていきたい。内田魯庵が「例えば船虫の一生の如き、単なる一挿話とするには惜しい話材である。」と評する^{注3}ような波乱万丈な生涯を送った人物である。作中では船虫の容貌を「年歳も三十のうへを、六ツ七ツにやなりぬべからん、物のいひざま進止まで、よろづ男めきたるが、さりとて容貌の醜きにもあらず。」(第六輯卷之一第五二回)という風に表しており、三六、七歳という当時としては若くない年齢でありながら、見た目は美しい女性であるということがわかる。

船虫という人物は、確かに夫と共に悪事を働き、八犬士と敵対する人物であるが、とても気がきき、賢く、時に女性とは思えないような大胆な行動を起こす人物である。自分の意見を誰に対しても物怖じせず筋の通った事を言い、妖怪にも負けないくらい強さを持ち、八犬士の手を何度も逃れている、ある意味とても魅力的な人物だということができると思う。悪事を働いているにも関わらず、その中に八犬士や他の登場人物にはない人間味や強

さというものを感じてしまうのである。船虫という人物について考える為に、悪としての船虫だけでなく、女・妻としての船虫に注目してみたい。

作中で決定的に他の悪女と違う船虫の行為は、初めの夫の仇を危険を冒してまで討とうとするということである。船虫は作中で四度夫を替えている。初めの夫である盗賊の並四郎、怪猫である赤岩一角、山賊である酒顔二、そして罎内の四人である。船虫は、夫を四度も替えるにも関わらず、最初の夫並四郎の仇を討とうとするのである。第六輯卷之二では、八犬士の一人である犬田小文吾の金子を奪おうとした並四郎が小文吾に返り討ちにされ殺されてしまう。そこで船虫は夫の仇を討とうと、小文吾を千葉家の宝物嵐山の尺八を盗んだ賊に仕立てようとするが、失敗し、捕まってしまう。しかし、船虫の仇討ちはまだ終わらない。小文吾を賊に仕立て上げる計画が失敗し、捕まってしまった後も、

船虫は小文吾に、伎倆のうらを欠かれたる、こゝに至て一言半句も、諍ひ誣るよしのなければ、怒れる眼に朱を沃ぐ、兇相悪鬼に異ならず。帯の間に隠したる、準備の魚切庖丁を、逆手に掌て閃かし、「良人の讐敵」と叫びも果す、跳り出走り蒐て、戒められたる小文吾を、撃たんとするを夥兵們、驚騒ぎて立塞り、「こは狼藉なり不敵なり。鎮れやッ。」と制す

れども、耳にもかけず突退る、女流に似げなき梟暴早剽、進むに前なき勢いと、且つその刃に辟易して、左右なく搦め得ざりける。透を得たり、と船虫は、小文吾目がけて突懸る、刃を外す身の翩し、捕圧へんにも両の手は、背にかゝる縛めの、索も心も紊ぬ大勇、避る刃尖あちこちと、再三たび疲労して、足を蜚して丁と蹀る、角觥に熟たる力士の突衝に、船虫は霎時も得堪ず、弱腰撲れて横ざまに、撞と転ぶを起しも立てず、片足に楚と踏すえたり。これにぞ弱る船虫は、虫ばかりなる息垂絶に、血の氣は失て全身も、眼も白くなるまでに、苦痛間なき程しもあらせず、夥兵等は面なげに、僉うち聚ひ立代りて、重索被る船虫を、引き起こしてぞ推居ける。

（第六輯卷之二 第五三回）

というように、自分の身の危険を顧みず、夫の仇を討つために小文吾に刃を向けて襲いかかっている様子が生き生きと描かれている。また、第八輯卷之一第七十五回では、越後小千谷地方の名物である闘牛の日に小文吾を見かけた船虫は、殺された夫並四郎の仇を討とうと膺按摩になりすまして小文吾に近づき、短刀で小文吾の喉を掻き切ろうとするが、失敗し、人里離れた庚申堂の天井に吊り下げられてしまう。このように、船虫は幾度となく初めの夫並四郎の仇を討とうとしているのだが、作中では船虫の八犬士

（犬田小文吾）に対する仇討ちの行為を「拍れて舌を掉ふもあり、或はその兇悪を、憎みて「撻よ殴けよ」とて、いと囂しく罵りを」（第八輯卷之二第七十五回）という風に批判したり、仇討ちを行った船虫を「猛悪の船虫」（第六輯卷之二第五十三回）と言いつつ、いあらわしたりしており、この船虫の仇討ちの行為が悪い行為、悪の行為だという風に描かれている。

その一方で、船虫と同じように夫の仇を討とうとしているのが、貞女浜路である。第三輯卷之四第二十八回で浜路の夫信乃は許我成氏に父から譲り受けた宝刀村雨丸を献上しに出かけたが、その村雨丸が網乾左母二郎によつて偽物にすり替えられていたことを浜路は知ると、左母二郎に「丈夫の仇人。」といつて切りかかる。しかし浜路は反対に左母二郎によつて切り殺されてしまうのであった。この行為は作中で浜路の実の兄である八犬士の一人犬山道節に「聞くにそなたは幼稚より、結髪の夫あり。そが為に苦節を成りて、命を惜ず、仇を罵り、又実の親同胞を、深く慕う心操、貞にして又孝なり。」（第三輯卷之四第二十八回）と、称賛されている。この悪女と貞女の二つの仇討ちは、どちらも、自分の初めの夫の為の仇討ちという点では共通している。船虫も初めの夫である並四郎以外の夫の仇は討とうとしていない。どちらも、たった一人の夫の為に仇討ちを行っているのである。なぜ、

浜路の仇討ちは称賛され、船虫の仇討ちは非難されるのであろうか。悪女だから悪女の行為は悪く、貞女だから貞女の行為は良いという考え方を除いてみていくと、その理由として「怨念」というものが挙げられるのではないだろうか。

浜路は仇を討とうとして失敗した後、すぐに殺されて死んでしまっている。一方船虫は、仇討ちに失敗し捕えられても、隙をみて仇討ちを試みたり、色々な策を考えて逃げ出し、再び仇討ちを行っている。これは、相当執念深い行為であり、何度も、しかも長い時間をかけて、たった一人の夫の仇を討とうとすることは、船虫の八犬士への怨みであり、「怨念」の表れなのではないだろうか。怨みを持つということは、玉梓が義実子に殺されたことを怨み、里見家を祟るという玉梓の強い怨念によつて里見家の悲劇、衰退が始まるということからもわかるように、「八犬伝」の中で怨念を持つことは悪の行為だとされている。怨みや怨念を持つという事は「悪」の行為であり、だからこそこの船虫の仇討ちは「悪」の行為だと作中では描かれているのである。

しかし、それ以上に、ここで表れていることは、船虫の仇討ちという強い「怨念」が「悪」というものを超えて、船虫の一途さや強さ、生命力というものに変わり、船虫を「悪」としても「女・妻」としても、とても生き生きとさせているのである。そ

もそも船虫は初めの夫並四郎がたまたま悪党だったというだけで、船虫自身がどうであれ、夫に付き従うのが女・妻だという考えが貫かれるこの作品の中では、妻はたとえ悪党だったとしても自分の夫に従わなくてはいけないのである。船虫は生きる為には「悪」にならざるをえなかったということもいうことができるのである。そして、船虫の最初の夫である並四郎が死んだ後、社会的地位の低い女性は次の夫を探して結婚しなければ生きていくことはできない。生きていく為に新しい夫と結婚することはしかたのないことである。しかし、妻は生涯たった一人の夫に尽くすことが「善」だとされ、二人以上の夫と結婚するのは「悪」だとされている。船虫は夫が死んで、生きるために新しい夫と結婚しているのである。船虫はそれまで連れ添っていた夫が死んでから新しい夫と結婚している。ただ、出会う夫がすべて悪党だったというだけである。これを極悪な行為と言い切ることはできないのではないだろうか。生きていく為には仕方のないことなのではないか。そして、生きる手段として夫を替えていく女性が初めの夫のことを一途に思い続けるということは当たり前のことなのではないかと思う。だから、船虫は初めの夫以外の、生きる手段として結婚した他の夫達の仇はとうとうしなかったのではないか。この仇討ちは、作者馬琴が「悪」を描く為の怨念を表現しようとし

たにもかかわらず、反対に、その怨念が「悪」の邪悪な思いというよりは夫への強い一途な思いという風に感じられるように変化し、「悪」を超えた船虫の強さやたくましさを生き生きと描き、そして勧善懲悪を貫く『八犬伝』の中で、悪知恵を働かせ、仇をとる為ならば、とことん残酷に、例え惨めに罵られても屈しないという悪の強さを生々しく描いてしまうという結果になったのではないかと思う。夫の仇を討つ為に八犬士に襲いかかる船虫の姿は、男にも勝るとも劣らない勢いで刃を振りかざし、相手に決して屈しない、異様なまでの激しさや執念、怨みが感じられる。この船虫の鬼のような激しさは人間ならば誰しもが持っているであろう人間的感情の表れであり、馬琴は悪という面をこれによって表したかったのかもしれないが、それは逆に、人間の本来持っている感情を強く感じさせる結果となり、船虫を大悪というだけでなく、魅力的だと読み手に感じさせてしまう人物とさせているように思う。

五 船虫の死

船虫の最期は八犬士達の手によって牛に突き殺されて死ぬというとても凄惨なものである。船虫の処刑の場面はなぜこんなにも残酷に描かれているのか、このことについて考えていきたい。

まず、処刑の場面は作中で次のように描かれている。

小文吾・現八は、牛の後に立よけて、手をもて尻を礮と拍つ。拍れて勇む牛鬼は、ものこそいわね蠼内と、船虫を乞と睨へたる、程しもあらず那をも這をも、長尖れる角をもて、腋下より肩尖まで、申き劈く怒牛の勢ひ、地獄の呵責を目前に、受けて苦しむ船虫・蠼内、眼血走る顔の色、赤くなり又蒼くなりて、腹に波うつ大叫喚、串るゝこと数番にて、やうやくに息絶えしかば、有繋に勇む六犬士も、這光景に蕭然と、思はずも目をあわしけり。(第八輯卷之八下套第九十一回)

この場面は、一見すると八犬士が面白がってやっているのではないかと思ってしまう程、八犬士の幼稚さを感じてしまうような異様な場面である。『八犬伝』の中で大抵の悪人は刀によってあつてなく切られて死ぬという場合が多い。私達現代人からすると、こんなに簡単な死に方でいいのかと疑問を抱いてしまうほどあつたりとした死の場面が多いのである。しかし、この船虫の死の場面は、牛に突き殺されるという処刑の方法はもちろん、牛に突きさされ息絶えるまでの船虫と蠼内の苦しみ叫ぶ様子までが詳細に描かれており、とても残酷な印象を受けると共に、ここまでしなくてもいいのではないかという疑問も湧いてくるような、すつきり

としない死の場面である。そこには作者馬琴の船虫をどうしても否定したいという強い思いが込められているように思う。

馬琴にとって船虫はどうしても否定したい悪であり、船虫の死の場面というのは馬琴の船虫への最大の復讐だったのではないかと思う。馬琴は船虫を典型的な悪人、悪女として登場させ、八犬士と敵対させることによって八犬士の善的性格を強調し、八犬士が悪を滅ぼしていくという「勧善懲悪」と「善と悪」という二つの対立を強調させたかったのだと思う。しかし船虫は馬琴の意図に反し、四節でも述べたように物語が進むにつれてとても人間味あふれた、悪女といえども力強い生き生きとした魅力的な人物となっていくってしまった。馬琴としては大悪を象徴するような散々悪事を働く、八犬士に罰せられて当然の極悪人を描きたかったのかもしれないが、船虫の悪事を描けば描くほど船虫はただ悪人・悪女というだけではない人間らしさや魅力を持つようになってしまったのではないだろうか。これは勧善懲悪を描きたい馬琴にとつては、好ましくない展開だったと思う。船虫は馬琴の道徳の中では物語前半部における大きな「悪」として意識されていたことがわかる。しかし、船虫は「悪」であるにも関わらず、「非道な極悪人」というにはあまりにも人間らしい魅力を持った人物となってしまう。馬琴はこれに納得がいかず、船虫の死の場面

をこんなにも残酷に描いたのではないかと思う。勸善懲惡を描く『八犬伝』の中では船虫のような「悪」の存在が魅力的な存在となってしまうことは馬琴にとつて許せないことだったのである。そして、船虫に残酷な死を与えることによって、船虫に対する苛立ちをぶつけ、船虫は普通の悪人とは違う「極悪人」であったということを表したのである。

けれども、この場面を読んでも、やっと船虫という「悪」を倒してやった、滅ぼしてやった、という達成感や喜びというものはいあまり感じられない。異様な残酷さと複雑なすっきりとしない思いの方が強く感じると思う。この死の場面では、船虫という悪が因果応報によって滅ぶことにより、八犬士の善の部分を引ききたて、善と悪をはっきりさせようとしたにも関わらず、八犬士が一見すると船虫の死を面白がっているようにも感じられる彼らの「悪」の部分、そして、八犬士も人間なのだと思わせてしまうような人間性や不完全さを引き出してしまい、それによって、さらに船虫をより人間味あふれた人物として強調して描いてしまった。人間味あふれる、魅力的ともいうことができる船虫を敵視し、残酷な殺し方をした八犬士が、「完全な善」にはみえず、また、船虫も「完全な悪」というには魅力的な人物であり、このようなかで勸善懲惡を推し進めてしまった結果、船虫のあまりに凄

惨で残酷な死に方に少しやり過ぎではないかという違和感と船虫への憐れみを感じてしまい、すっきりしない死に方となつてしまったのではないかと思う。

六 船虫像まとめ

このように、「船虫」という人物についてその特徴から死までをみてきたが、一体「船虫」とはどういう人物なのであろうか。

小西甚一氏が「馬琴と『八犬伝』の世界」という論文の中で八犬士達のことを「かれらは、けつして修身科で良い答案を提出する模範生といえず、人間としての弱点や限界をもち、苦難に傷つきながら悲痛な流離を経験する。」^{注4}という風に言っている。このように、八犬士も儒教などの倫理道德を頑なに守り、武士道の理想を実現する為の理想的な人物ではなく、人間的であり、完全な人物であるということは言えないと思う。これは、船虫の処刑の場面でも表れていると思う。しかし、彼ら八犬士達が第一に考えているのは儒教道德や武士道といったものである。自分が儒教道德や武士道に反してしまうような時は命を捨てる覚悟で生きている。確かに彼らは人間としての欠如を何かしら持っている人物かもしれないが、彼らの生きる目的は儒教道德や武士道を全うすることにある。「生きる」ということそれ自体については全く関心

がない。それに対し、船虫は儒教道徳や武士道といったものにはまるで関心がなく、彼女にとっては「生きる」ということそれ自体が人生の目的で第一に考えることであり、「生きる」ことに異様に執着しているのである。船虫と八犬士とは人生における大切なこと、重要視することが全く異なり、生きることの価値観が真逆なのである。

船虫はたとえ夫が殺され、八犬士に捕まりそうになっても何度も逃げ出し、最後は辻君になってまで必死に生きようとする。そして、たとえ悪事を働いてでも生きていこうとするのである。彼女は夫並四郎を亡くしてから牛に突き殺されるまで、ずっと放浪の生活を送ることになる。いつてしまえば、自分の帰るべき家のない人ということができる。しかし、自分の身の哀れさを嘆くことも、人の道を逸れた生き方を疑問に思うことも、反省することもしない。そんな必死に「生きる」船虫の姿はただの八犬士の敵である悪女・悪人というだけでは収まらないものがあると思う。必死に生きようとする船虫にはやはり生きる為ならなんでもするという強い生命力を感じずにはいられない。また、そんな「生きる」ことに執着している船虫が自分の初めの夫の仇を命の危険を顧みずに討とうとする様子は八犬士への怨念というだけではない、夫並四郎への並々ならぬ思いというものが感じられる。そし

て、船虫の死は「生きる」ことを人生の第一として考えてきた彼女の、「生きる」ことへの強い執着心がついに八犬士によって断ち切られてしまう場面である。この死の場面の残酷さは馬琴の船虫の復讐の念に加え、船虫の「生きる」ことへの強い執着心が彼女の死の場面の壮絶さ、残酷さにさらに拍車をかけているように感じた。

このように、船虫という人物は作中で極悪人とされながらも、見方を変えようと、人間であれば誰しもが普通に持っている「生きる」、「生きたい」という本能や感情を人生の第一と考え、どんなことをしても生き抜くという生への強い執着心を持った人物であり、それはある意味で儒教道徳や武士道を頑なに守る八犬士達よりも一般社会に生きる読者達の立場に近い人物だということができないのではないだろうか。そして、それが船虫の人間的な部分をより一層引き立て、強い生命力をもった魅力的な人物として生き生きと描かれる結果になったのだと思う。

『八犬伝』という作品の中で、八犬士が人間らしくない理想の「道徳的人物」であるとすれば、船虫は一般庶民に近い、普通の人間が持っている感情や欲望を素直に表す、まさに「人間らしい人間」ということができると思う。しかし、これら船虫の持っている「生への執着心」や「欲望」というものは作者馬琴にとって

は「悪」であり、このようなものをすべて持っている船虫は極悪人であるにも関わらず、人間である読者は人間として皆が当然のように持っている感情や欲望を素直に、そしてあるがままに表している「人間らしい」船虫に魅力を感じてしまうのだと思う。

しかしそれと同時に、作者馬琴にとって船虫は厄介な、想定外の人物となってしまったのだと思う。八犬士の善的性格を引きたくて、善である八犬士が悪を滅ぼすという勧善懲悪の構図を作る為に用意した悪である船虫は思わぬところで予想外の人間的魅力を表し、さらには「悪女」としての船虫を強調して描いていくことで、船虫の「悪」としての行為を生き生きと、生々しく描くことになってしまったのである。そしてその煮え切らない思いが船虫の死の場面で表れたのである。私達読者にとって魅力的な人物である船虫も、馬琴にとっては厄介な存在だったのではないかと思う。

おわりに

今回、船虫像について論じてきたが、なぜ、船虫は、悪女でありながら夫の仇を討とうとするという矛盾した行為をし、さらに最期には牛に突き殺されて死んでしまうという残酷な死を迎えるということが『八犬伝』の中で起こってしまったのだろうか。そ

れには『八犬伝』において貫かれる馬琴の思想や道徳というものが大きく関わっているように思う。濱田啓介氏は『八犬伝』について「『八犬伝』は思想の文学でもあり、思想が先にあって、それが文学的形象となつて表れているものである」という風に評している。『八犬伝』の中では馬琴の決めた道徳や思想、論理が絶対的な力を持っているのである。また、濱田氏は『八犬伝』において馬琴が用いた思想について「輪廻転生・得脱往生・因果応報などの仏教思想、神仙思想、仁義八行、勧善懲悪などの儒教思想、忠義や復讐・家督相続などの武士道や封建社会思想などの複合である。」と述べている。勧善懲悪などの儒教思想や武士道などが絶対の世界において、船虫という人物は完全に「悪」という立場の存在である。たとえ読者が船虫を魅力的だといっても、この『八犬伝』の世界においては絶対的な「悪」となり、彼女を賛美する者はないのである。『八犬伝』の世界では、道徳や論理が第一に考えられる為、馬琴はここで、馬琴の考える女性観、論理に外れた船虫を悪の側の存在としてしまった。ここに、矛盾が生じてしまったのである。

妻としての船虫の立場からすれば、初めの夫への一途な思いの表われであり、仇討ちの激しさは船虫を悪人というよりは、むしろ人間として当然の感情を表現しているように感じさせ、船虫を

人間的感情があふれる強さを持った人物であるとし、さらにはこのようなものを持った船虫の悪人としての「悪」の行為は船虫からあふれる生命力や強さと相俟って生き生きと描きだされることになってしまっている。より悪を悪らしく描こうとした結果、船虫の人間味というものが出てきてしまったのではないか。道徳や論理というもので理路整然としているものが善とされるならば、その中で悪の行為を描く為には、感情的で激しい行為を描かなければならない。しかし、感情的で時に激しさを伴う行為というのは、人間が誰しも本来持っている人間らしい部分であるのではないだろうか。そして、それらの矛盾を払拭しようと船虫を極悪人として悪く悪く描こうとそこに力を入れてしまったことが、勧善懲悪の物語の中で、型にはまった道徳的な悪でない、人間的な悪をこんなにも生々しく描き、そうすることでさらに船虫の人間性や魅力を強調して描く結果になってしまったのではないだろうか。そして、船虫の死の場面では、道徳や論理と船虫の間の矛盾を埋めようとするために、「今までの船虫の行為というのは、このくらい凄惨な死に方をしなければならぬ罪なのだ」という因果応報を強調するが如く、作者馬琴の怒りにも似た残酷な死の場面が描かれたのだと思う。

また、さらに言うと、作者馬琴は無意識下で船虫という人物を

気に入っていたのではないかと思う。しかし馬琴は、勧善懲悪を描く『八犬伝』において、自分が悪である船虫を気に入っているということを認めたくないが為に、その気持ちを消そうと、船虫を悪く悪く描いてしまったのではないかと思う。馬琴の作品には思想だけでは語りつくせない、思想から外れた所がある。それは悪が生き生きと描かれている所である。ただ思想を語るだけならば、悪を生き生きと描く必要はない。しかし、馬琴の悪の描き方は思想からはみ出るようなところがある。それは、馬琴が無意識下で悪を気に入っている、悪に気を取られているからだと思う。そして、船虫の残酷な死に方は、「船虫を気に入っている」ということを認めたくない馬琴が、その気持ちを打ち消す為に無意識の内に残酷に描いてしまった場面だと言えると思う。

「船虫」は『八犬伝』という理想主義文学、作者馬琴の理想の塊のような物語の中で、馬琴の理想とは真逆な非理想的・道徳的人物として位置付けられている。しかし、その物語の中で彼女は、魅力的な人物として、生き生きと活躍している。彼女は思想や道徳を引き立てる為の登場人物だったが、物語の中で、「船虫がいるからこそ面白くなる」という役割としての、「善を引き立てる為だけの悪」、「典型的な悪役」ではなくなり、ただの悪役という枠を飛び越えて、「船虫」という一人の登場人物とし

て注目できるくらいに魅力的な人物となったのである。そして、「善の引き立て役」から善と正反対の人間の本能や感情的部分を強調する人物となったのである。

今回私は、いつも注目されがちな主人公八犬士、善の側ではなく、もう一つの物語の主人公である悪の側に注目してみたいと思いい、悪女船虫について論じてきた。「八犬伝」ではこの作品の柱となっているのが勧善懲悪などの道徳や思想・論理だということもあり、作者馬琴が『八犬伝』の中で伝えたい思想や道徳を全うするのはやはり主人公八犬士達善の側の人物である。しかし、道徳や思想を読者に伝える為にはやはり善だけでは駄目なのである。相手役である悪の側の存在が欠かせない。そして、この悪の存在が強ければ強いほど、善というものも強く大きなものになると思う。あまりに悪の存在が弱いと、読者はあまり印象に残らず、伝えたい道徳や論理もよく伝わらないように思う。今回、『八犬伝』において船虫という大きな悪が登場したが、やはり彼女の存在は善の側と表裏一体の存在なのである。善も悪も、どちらが欠けても物語は成立しないのである。そして、『八犬伝』という善の側の目線で一方的に語られる物語の中にも、「善」の側から語られる「悪」とは違う、悪の側から語るそれぞれの物語というものが存在するということを、悪女「船虫」について論じる

ことで感じることができた。

注

注1 「花田清輝著作集Ⅳ」 花田清輝 著 株式会社未来社 に収録。「もうひとつの修羅」より論文「犬夷評記」三五八ページ。

注2 以後、「南総里見八犬伝一十」 曲亭馬琴 作 小池藤五郎 校訂 岩波文庫 より原文を抜粋する。

注3 「南総里見八犬伝十」 曲亭馬琴 作 小池藤五郎 校訂 岩波文庫 に収録。内田魯庵「八犬伝談余」三七二ページ。

注4 「日本文藝史Ⅴ」 小西甚一 著 講談社 に収録。「馬琴と『八犬伝』の世界」二二八ページ。

注5 「新潮日本古典集成 別巻 南総里見八犬伝 一」 曲亭馬琴 作 濱田啓介 校訂 株式会社新潮社 に収録。「解説 小説・南総里見八犬伝」五〇七ページ、五〇八ページ。

(いしはら つぼみ 二〇一一年日文学)